

〈つなぐ教室コラム〉「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト スクールカウンセラーと教員が“つながる”支援（サポート）

山崎沙織

1 はじめに

私はこれまで心理職として様々な職場で働いてきたが、かわらず続けてきた仕事がスクールカウンセラー（以下、SC）であった。SCという仕事をする中で特に大事にしていることは、教員やスクールソーシャルワーカーといった専門スタッフとつながり、チームで児童生徒を支援することである。これが、「つなぐ教室」の講師として学生の前で話をする“ご縁”となったのではないかと感じている。現在、私は教育委員会事務局の心理職として勤務しており、地区内の小中学校のSCの活用を含めた教育相談体制の整備に携わっている。それに加え、現役のSCとして学校の先生方と日々児童生徒の支援を行っている。多くの学校で、教員とSCが連携・協働することにより、お互いの専門性を活かし、児童生徒や保護者に効果的な支援ができると実感している。逆に、SCとつながりが薄い学校は、結果的に児童生徒の効果的な支援につながらず、教員、SC共に心身の負担が増える。よって、これから学校現場で教員として仕事をする学生たちに、SCという心理職とはどんなもので、どのようにつながると、児童生徒への効果的な支援ができるか、考えるきっかけにしてほしいという思いを込めて講義をした。

2 学校の専門スタッフであるスクールカウンセラー

「SCって誰のために何をする人？」と学生に問うことから授業をスタートさせた。学生にかかわらず多くの人が、“カウンセラーは悩んでいる特定の子どもの相談を受けるために学校来ている”と思っているのではないだろうか。石隈（1999）は、SCの援助サービスの対象は、不登校、いじめ、非行などの問題や障害で特別の援助を必要とする子どもだけでなく、すべての子どもが、発達し、教育を受けていく過程で何らかの援助ニーズを持つとし、全ての子どもを対象として行うオリエンテーションも重要な援助サービスであると示している。よって、SCの支援の対象は、「学校に在籍するすべての子ども」となる。また、SCの役割は多岐にわたる。例えば、何か気になる行動がある児童生徒がいた場合、その行動にはどのような背景があるか心理的な視点を用いてアセスメントし、教育の専門家である教師と心理の専門家であるSCが、異なる専門性を活かして作戦会議（コンサルテーション）を行う。そして、カウンセリングといった子どもにとって有効な方法を用いながら支援していく。特に、教育相談の要である教育相談コーディネーター教員とSCが連携し、生徒指導や教育相談が一体となったチームで児童生徒の支援を行う。

3 スクールカウンセラーが会える子どもたちとその支援（サポート）

SCが会える子どもたちは、「悩みを持った特別な人」ではない。人は誰しも自分にとって受け入れがたい自分の特徴や性格をもっているのではないだろうか。学生たちには、「悩みや困り感を持っていることは普通のこと、それを調整・コントロールすることで人は適応している」ということを、ワークを通して学んでもらった。つまり、子どもたちは未熟な部分があり、適

応することが難しいだけなのだ。よって、SCは『適応することが難しい子ども』に出会い、カウンセリング等を通して自己理解を促し、自分に合った調整やコントロールを身に付けていくサポートをする。また、SCは『教員や保護者が気になる子ども』、言い換えれば、大人が対応することに難しさを感じている子どもとも出会う。そのような子どもたちに出会ったときは、周りの教員や保護者に対して、子どもを見る視野を広げ、子どもたちの困り感の背景に隠されたメッセージを読み取ることを支援する。子どもの発しているメッセージを保護者や教員に分かりやすく翻訳するのもSCの重要な仕事と言える。そして、SCが出会う子どもたちは、『成長の可能性がある子ども』であることを忘れてはならない。困っている状況に対してSOSを出すことができ、サポートを受けるチャンスを得た子どもは、この経験を通して確実に成長する。この視点は、学生たちにとって特に新しいものだったようだ。

さらに、支援の後に（サポート）と付け加えているのには、私なりの思い入れがある。学校や支援者の中では「支援」という言葉をよく使うが、児童生徒や保護者に「支援」という言葉をいきなり使うことは、抵抗感を高める場合もある。私は児童生徒や保護者に支援の提案や相談をするときは、必ず「サポート」という言葉を使うようにしている。これも、学生に届けたい大事な内容の一つであった。

4 スクールカウンセラーと教員が“つながる”子どもの支援（サポート）

SCと教員がつながることにメリットを感じてもらい、学生が教育現場に出たときに具体的に動けるようになってほしいという思いから、実際に私がSCとして連携・協働している学校現場の教員の声を紹介した（表1）。教員とSCが“つながる”ことで、児童生徒への適切な見立てが可能となり、それに応じた支援ができるといった現場の声があった。また、SCが支援に入ることで、学校が保護者との良好な関係を築けることや、医療機関などの専門機関との連携が進み児童生徒に効果的な支援ができるといった声もあげられた。そして、教員がSCに気軽に相談できることは、教員の不安感や負担感が減ることにもつながっているようだった。

では、実際に教員とSCが“つながる”ための方法や工夫としてどんなことがあるのだろうか。第一に、教育相談コーディネーターが自分の役割を理解し、SCや児童生徒や保護者、教員をつないでいく役割の重要性があげられた。また、教員がSCと連携・協働して児童生徒を支援した成功体験が、SCとのつながりを強めるようだ。よって、学生たちには、SCの専門性を知り、学校現場に入ったらSCとかかわりを持ち、まずは一緒に児童生徒の支援を試みる体験をしてほしい。

表1. 子どもの支援において教師と専門職スタッフがつながる（連携・協働）メリットは？

適切な見立てと支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ケースのアセスメントをすると同時に、支援策についても具体的に提案してもらえる。よって、児童生徒に合った支援になる。 ・教員は専門知識が全くないので、思春期の子どもの心身の症状や状態について見立てがもらえる。 ・教育相談担当がSCの見立てを職員全体に共有することで、子どもに対する理解が深まり、その子に合った対応ができる。 ・ここまで何をするかなど、支援の見通しをもつことができる。 ・児童生徒の状況を「なまけ」として捉えたり、「根性」や「頑張り」といった対応にならない。 ・教員の知識だけでは見えなかった異なる方向での動き方が見いだせ、出来る支援が増える。
保護者との良好な関係	<ul style="list-style-type: none"> ・つながるのが苦手な保護者もSCとは笑顔で会話できる。 ・生徒・保護者がSCとつながれることで、教員には話しにくいことが話せる。 ・教員だけの視点で対応していると、児童生徒や保護者と対立関係になってしまうことがある。SCが支援に入ることで、児童生徒や保護者の状況を客観的かつ、教師を慮って伝えてもらうことができ、教師が児童生徒や保護者にうまくつなぐられ、良好な関係が築ける。また、教員の不安の払拭にもなる。
専門機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な外部機関（医療機関や相談機関）を紹介してもらえる。 ・児童生徒を外部機関につなぐのは学校だとしても、SCから外部機関に適切に情報提供をしてもらえるので、児童生徒や保護者が外部機関に適切につながる。 ・専門機関へのつなぎ方が教師は適切にできない。専門機関につなぐ場合の適切な表現や伝える内容の吟味を一緒にしてもらえることで、専門機関に児童生徒や保護者がうまくつながる。また、つなぐ際の教員の不安が減る。
教師の負担軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・若い担任が不登校の生徒を抱えていても、SCと支援をすることで不安にならない。 ・年配の教員も、困っていることをSCに気軽に相談できる。 ・一人で抱え込まないでよくなる
効率的な支援	<ul style="list-style-type: none"> ・SCが支援に入ることで、必要なことに計画的に時間を使うことができ、教員が無力感を感じない。

5 さいごに

学生の段階で SC の講義を聞く機会は、ほとんどないと考える。この貴重な機会に“教員になったら SC とつながりましょう”というメッセージだけではなく、“SC とつながりたい”と思ってもらえることこそが学生の行動を変える第一歩なのではないだろうか。SC とつながることは、児童生徒や保護者への支援（サポート）を充実させるだけでなく、教員自身の不安や負担軽減にもつながるといふ、自分にとってプラスの効果があることも心に留めて、教育現場や社会に出てくれたらと願っている。

山崎沙織（鳥取県教育委員会事務局 中部教育局）